

## 教員免許状更新講習

### 「コミュニケーション・スキルアップの3日間！」レポート

京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター 講師

岡崎大輔

---



京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センターでは、2009年度より、学びの場面における「コミュニケーション」をテーマとして、教員免許状更新講習を開催している。本年度も8月1-3日の期間で「コミュニケーション・スキルアップの3日間！」と題して講習を開講。過去最大の参加数であった昨年度同様、約60名もの先生方にご参加いただいた。ここでは、3日間のプログラム内容を簡潔にレポートし、ご参加いただいた先生方の声を紹介する。

#### 1日目

暑い夏の京都で始まった講習は、『「アート」「コミュニケーション」「教育」、これらはいずれも「投げ手」と「受け手」によって成り立っており、本質的には同じものといえる』という伊達の挨拶から始まった。リラックスした雰囲気づくりも兼ねて、北野が「鏡をみながら逆さまの世界を歩く」を行った。鏡を目の下にあけると、天地が逆転して映る。その状態で歩くことで、いかに身体や思考が視覚情報に影響されているかを実感するワークショップだ。

次に行われたのは、「ブラインド・トーク」。このワークショップでは、2人1組になり、目隠しをした相手に言葉だけで作品を伝える。人は例え同じものを見ても、同じようにみているとは限らない。そのギャップを埋める為には、経験の違いによって別の見方をしてしまう。伝え手、受け手という役割は決められているものの、イメージを共有するためには互いに聴き合うという共同作業が不可欠だ。これはコミュニケーションや学びを深める関係においても同様であることが示された。

午後からは伊達による「本気でマンガを読んでもみる！」と銘打ったマンガ読解ワークショップが行われた。たった数頁のマンガを約2時間かけて読み合わせていくが、「おそらく時間になっても話し足りないはず」という伊達の予想通り、会話は尽きそうにない様子であった。このワークショップは物事には常に様々な解釈の可能性があることを理解するとともに、他者と解釈をすりあわせるプロセスにおいて、自分がそう思った根拠を考え、伝えることの重要性を体験していただいた。

初日の最後は1日の振り返りと「翌日から、この講習でどのように学ぶか」をテーマにディスカッションした後、ひとりひとりに指針を付箋紙に書き出しただき全体で共有した。その後「みる」こととコミュニケーションについて、小論文を記述していただいた。



## 2日目

午前には前日の振り返りと、伊達による『「みる」からはじまる「学び」と「コミュニケーション」』と題したレクチャーからスタート。その中で伊達は教師の役割は知識や情報を与えるのではなく、生徒が知りたい・考えたいと思う状況をつくることが重要ではないかと指摘した。また物事にはひとつの正解はない、人類は多様だったからこそ発展できたこと。人は物事をみるとき自分のみまいようにしかみておらず、物事を多面的にみるためには他者とのコミュニケーションが有効であることを示した。レクチャー後半には「みる・考える・話す・聴く」の4つをベースに、コミュニケーションを通して行う鑑賞プログラム ACOP/エイ Copp (Art Communication Project) を紹介。ACOP が「コミュニケーションを介した鑑賞教育」に留まらず、「鑑賞を介したコミュニケーション教育」としても効果を上げており、さらには、これが社会のあらゆる場面で応用可能であることを示した。



午後からは大野教授によるワークショップ「具体新書-おとなが学ぶ二枚貝-」と、グループディスカッション「仕事の報酬と動機付けの関係」が行われた。具体新書ではハマグリの本柱の数を、①当て推量、②実物を観察した後、③グループ全員で討論した後、と三段階で答える。段階を追うごとにばらついてきた各自の回答が収束していく体験をしたことで、詳細な観察と客観的根拠に基づく思考と対話の重要性が明確になった。

続いて、「報酬によって、動機付けが弱まる」という説について、「そう思う」「どちらとも言えない」「そうは思わない」を、まず個人で考え、次には、グループで討論して考えるという作業を行った。討論した結果では、多くの受講者が「どちらとも言えない」を選んだとはいえ、決着はつかなかった。この状況について大野教授は「いくら討論しても個人的な体験や価値観、問いの解釈の違いによって決着しないことは多い」と述べた。さらに、「地球誕生からの歴史を考えると、人類が地球上に存在している時間はまだほんの一瞬。人類の対話力はまだまだ未熟で鍛錬が必要」と語り、社会が発展するための大きな資源として、人の考えの多様性を挙げ、それを活かしていくことの意義を示した。2日目の終わりは、「考える」とコミュニケーションについて、小論文を記述していただいた。

### 3日目

最終日の午前には伊達による「聴く・応答する」ワークショップ。3人1組となり、2人が会話し、もう1人は観察者となる。与えられたテーマを数分間話すという一見シンプルなワークショップだが、あるルールが存在によってたちまち会話はスムーズに進まなくなる。そのルールとは、相手が話した言葉に対して「あなたの言いたいことは〇〇ですね？」と逐一確認し、相手からOKをもらわなければ会話を先に進められないというものである。

またこのワークの最後には、相手の使った言葉を一切用いず確認するというルールも設けられている。段階が設けられており、単に言葉を表面的に聞くのではなく、相手の言葉の裏側にある文脈や意図、想いを汲み取って耳と目と心を使って「聴く」ことで、相手と自分の間に何が起こるか体感するねらいがある。

午後は3つのグループにわかれ、ACOPによる作品鑑賞を行った。伊達、北野、岡崎のナビゲーションにより2作品を約2時間かけて鑑賞し、グループメンバーの多様性によって起こる作品のみえ方の変化や、鑑賞の深まりを体験する機会となった。

ACOPを終え、再びひとつの会場に戻った後、締めくくりとして「3日間で学んだことは何か」「学びを活かすために明日から具体的に取り組むこと」について、参加者を校種別のグループに分けて、ディスカッションを行い、さらに、各自のアクションプランを付箋紙に書き出し共有した。その後「3日間の学びを具体的に現場でどう活かせるか？」について小論文を記述し、3日間の講習が終了した。



参加して下さった先生方の声を、一部抜粋して紹介する。「コミュニケーション・スキルアップの3日間！」と題した本講習は、先生方の「コミュニケーション」という概念にも変化をもたらしたようである。

- \* コミュニケーションとは“みる”“考える”“話す”“聴く”の4つのプロセスであり、苦手な“話す”だけではないことが大きな気づきです。見えているものがみえていない、自分の価値観や物の考え方が人の話を聴いている、ある一定の範囲以上の事を考えていない、などなど日常的に自分がどれほどコミュニケーションしていないのかが明らかになった。
- \* 「コミュニケーション」といえば「はなす」「きく」と思い込んでいましたが、「みる」こともコミュニケーションのひとつだと考えると、自分の枠が広がり、文字通りに新たな世界が見えたように思います。
- \* 自分の物差しで人を見るのではなく相手の考えをよく聴くことで自分のこともよく分かり、周りに人がいてくれるから自分なりの見方と他者の見方の違いが分かり、お互いに補っていける。このことがコミュニケーションをとることの大切なところなのかなと思えた
- \* 今回この講習に参加してコミュニケーションとは、他者とのかかわりを良くするためだけのものではなく、自己理解を深めるためのものだという事をあらためて感じました。そうすると、これが

らの世の中を生きていく生徒たちにもコミュニケーション能力は大変重要であると、自分の中でごくすっきりとした形でおちた気がします。

- \* コミュニケーションと言う言葉を普段簡単に使い、コミュニケーションが取れる人とか取れない人という目で見えていた自分がいました。終わってみて、コミュニケーションをとるのにどれだけのエネルギーを使うのかを体験し、普段のコミュニケーションの軽さを感じました。明日から現場にもどり、子ども達を前にした時、一人一人を見つめる目、想いをあらためようと思い、もう一度真っ白な初めて出会う感覚で出会ってみたいと思います。

コミュニケーションの捉え方そのものにも変化を起こしたこの3日間は、「コミュニケーション・スキルアップの3日間！」に加え、「コミュニケーション・ブレイクダウンの3日間！」でもあったといえよう。コミュニケーションをみつめる新たな目を身につけていただいた先生方。現場を新たな目でみつめて行動することについて、力強い決意を表明してくださった。

- \* 芸術大学という思い込みに打ちくだされました。技能だけではアートは成立しない事も感動しました。つまらない事や仕事だと自分から逃げずに、動機づけをするのも今後の自分次第ですね。
- \* 児童の行動や表現をどのように捉えるかということをより意識的に行っていきたい。「こういうことを言ってるからこうだ」とか「あんなことするからああいう子だ」という言葉は決して「見た」ことに基づいておらず、自分の価値観から判断したに過ぎない。だからこそ、こういう捉え方のクセというか危うさを認識しながら、しっかりと本当の意味で、相手と「見る」「考える」「話す」「聴く」を意識してコミュニケーションを図っていききたい。
- \* これからは特に、うまく授業に入れていない生徒、問題をかかえている生徒にこそ、もう一歩だけでも、ていねいに向き合ってみようと思います。(なぜわかってくれないの!?とため息をつく前に、もう一度新しい目で見、新しい頭で考え、新しい耳で聴く、そうすれば自ずと相手の心に届くチャンスがあるのかもしれない。)
- \* 思いこみにとらわれずに、日々の教育活動を見て、再検討したいです。毎年やっているから、昔から当たり前のことだから、と「当たり前」と思っている活動が多く、異動もない職場です。その「当たり前」の枠を外して見直したいです。
- \* 目の前にいる子ども達について見直しをするよいきっかけとなった。一人一人の育ってきた環境や背おっているものをみていきたい。また一人の見方にはまだまだかたよりがある。たくさんの先生が同じ子どものことをどう見ているか知りたかった。
- \* 自分より経験値が少ないうえに、人に言葉で何かを伝えるってことをまだまだ苦手としている子はたくさんいる。悩みもたくさん抱えている。同じ立場に立つって自分のことを知り、相手の痛みを知る。口で言うのは簡単だけど、実感したのは初めてだ。これから、自分の可能性、相手の可能性を恐れず、少しずつでも対話しながら、一緒に前に進んでいけたらと思う。
- \* 子どもをありのままに捉えたいと願うなら、まずはたくさん目（仲間）を集め、多角的に光を当てる場が必要だと思いました。そうして初めてスタートに立てると思います。
- \* 私は授業の中で、今回の講習のことを話して「大人でも初めコミュニケーションをとるのは難しい」という所から、「話を共有することで分かることがある」という話をもって、一人一人のつながりを結びつけるきっかけを作っていきたい。そして分からないことがあっても、周囲の考えをきっかけに、自分ない「個性」「才能」に気づき、それを自分に取り入れる「勇気」のひとさじになればいいと思った。

- \* 正解がないと、自分の意見、思ったことを素直に言えたこと、この経験を子どもたちにも味わってほしいと思う。表情、聴き方、聴いたことへの受け答えなどは、まだまだ自分でも試行錯誤の繰り返しかもしれないが、それでもやっていきたいと思う。
- \* 3日間の学びを通して私が感じたことは、私は「想定外を恐れている」ということだ。授業が一方通行でも、それに安心してしまうのは「想定内」で終わるからだ。自分が想定していないものが出てきた時、それに対応できるか不安だからだ。でも今は「想定外を楽しもう」という気持ちになっている。「言葉はその人自身がのっかっている」と思うと、どんな発言もおもしろく聞けそうな気がする。
- \* 今まで見たいものしか見ていなかったし、聴きたいことしか聴かないようにしていた自分に気づき、恐さと、生徒への申し訳なく思う気持ちを抱きました。思い込みと先入観で、どれほど自分の世界を狭めていたのでしょうか。生徒を枠型に押し込めていたのでしょうか。それに気付いてしまったからには、もう狭い世界には戻りたくありません。他者は他者、自分は自分、と一歩引いてさめた目で世界を眺めていた自分と別れ、他者を巻き込んで変えてしまうぐらいの熱さを持ち続けたいと思います。

先生方の言葉は我々にも内省を促し、そこから新たな学びと気づきを得ることができた。教える側・学ぶ側という固定された関係ではなく、立場を入れ替えながらともに進んでいくこと。「これでいい。わかった」と自分や他者の可能性を閉じることなく、新たな出会いとの対話を通じて「発見」を楽しみたい。再び、今回の出会いがどこかでつながれば幸いである。